

TIJ 日本語教育研究会通信

No.39 2009.5.15 発行

発行 : TIJ日本語教育研究会事務局
東京都葛飾区新小岩 1 - 17 - 10
Tel:03(5607)4100 / Fax:03(5607)4102
E-mail tij@tij.ne.jp
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



桜の花とともに、平成 21 年度がスタートしました。昨年来の不況の影響で職を失った人たちや職を失う危機感を持った人たちが、これを機に日本語力を高めようと、地域の日本語教室に押し寄せていると聞きました。TIJ は、政府の留学生 30 万人計画のおかげで、この春数年ぶりに多くの就学生が入学し、活気付いています。

2 月に TIJ の文化祭である「TIJ 文化交流祭り」を開催しました。日本人の皆様、地域の皆様と、TIJ の学生の交流と、学習成果の発表を目的としており、今年もお客様として、日本人の皆様に参加していただきました。ありがとうございました。

一昨年から作成を続けて参りました中級の読み教材を「続・楽しい中級の読み」として冊子にまとめました。本号に TIJ のクラスで使ってみての報告を掲載しました。またサンプルを一部添付しました。まだ途中ではありますが、使ってみたいとお考えの方がいらっしゃいましたら、実費でお分けいたします。詳しくは巻末の事務局からのお知らせをごらんください。

6 月から一か月に一回、上級の文型勉強会を開きます。ご希望の方はご参加ください。
本号の内容

1. 「上級で学ぶ日本語」の文型勉強会のお知らせ
2. TIJ 文化交流祭りを振り返って 1 上級クラスの故郷紹介
3. TIJ 文化交流祭りを振り返って 2 中級クラスの文化紹介
4. 中級スピーチ大会優秀者スピーチ
5. 中級スピーチ大会で考えたこと
6. 「続・楽しい中級の読み」を使って
7. 海外便り - 広東省旅遊学校に赴任して
8. 事務局からのお知らせ

付 「ごほうびシステム」本文 「ごほうびシステム」練習

「上級で学ぶ日本語」の文型勉強会のお知らせ

日本語教育の上級で使われている教科書の一つに「上級で学ぶ日本語」があります。「中級から学ぶ日本語」の姉妹書で、T I Jでも長い間使っています。以前T I J日本語教育研究会で「中級から学ぶ日本語」の文型を研究したことがありますが、「上級で学ぶ日本語」については、それぞれの教師が自分なりに解釈し、研究し、教えてきました。

今回、この「上級で学ぶ日本語」の文型を勉強する会を持つということになりました。この教科書の「使いましょう」で扱っている文型は、多くは能力試験1級の文型です。クラスで学生に教えながらも、「この文型の伝えようとしていることは、自分の解釈でいいのだろうか。どうも学生が正しく理解してくれていないようなのだが、自分の教え方がよくないのだろうか。」などと、一人悩んできた方も多いのではないかと思います。この機会に皆様で協力して、話し合い、知恵を出し合いながら、それぞれの文型の使い方を観察し、学習者へのよりよい伝え方を考えたいと思います。

次のような日程で1か月にほぼ一回のペースで続けていきたいと考えています。より多くの方の参加をお待ちしています。

日時	第1回	6月23日(火)	2:30~4:30
	第2回	7月31日(金)	2:30~4:30
	第3回	8月19日(水)	2:30~4:30
	第4回	9月29日(火)	2:30~4:30
	第5回	10月26日(月)	2:30~4:30

場所 T I J 東京日本語研修所

参加ご希望の方は、前日までにT I Jにメールまたはお電話でお申し込みください。

TIJ文化交流祭りを振り返って1 上級クラスの故郷紹介

- TIJ生活で気づいてもらいたいこと -

北内直子 (TIJ)

今年も例年通り、文化交流祭りが2月21日に行われました。今回は、故郷紹介のプレゼンテーションに取り組むことで、ひとつの成果を得た学生たちについてご報告したいと思います。

TIJ生活も2年目の終わりを迎え、国立受験組を除いてほとんど進路が確定しているこの時期、上級の学生たちは緊張から解き放されて脱力状態にあります。今は勉強と名のつく面倒なことはしたくない、作文なんてとんでもない、という気分の学生たちに、スピーチ大会、文化交流祭り、卒業文集作成と怒涛のように作業が押し寄せる時期でもあります。実はこの時期が、受験勉強に左右されずに日本語運用力をつける絶好の機会だと私たちは考えています。今まで培ってきたものを活用して、自由に言語活動を広げてもらいたい。

しかし、親心子知らず。いかにやる気にさせるか、毎年これが準備作業の第1歩となります。

このクラスは入学当初から、日本語運用力に大きな差がありました。その差は自信や積極性の有無となり、TIJでの学習態度にも顕著にあらわれていました。故郷紹介のプレゼンでは、その自信の有無が良くも悪くも発表の成果として残ったと思います。

資料集め、原稿書きという一連の作業から発表練習に入ると、日本語に自信のある学生たちは、さらっと一通りこなして終わらせ、余裕を見せていました。一方、そうでない学生たちは、原稿の文法を訂正され、それを覚え、発音練習を繰り返し、何回もダメ出しをされて、最後にはお互いのプレゼンを見合って練習するほど、念を入れて準備を繰り返していました。それでも、不安要素を多々抱えながら本番の日を迎えました。

さて、交流祭り当日朝、自信家の学生たちが集合時間に集まらないという事態が起こりました。自分たちの“出番”の時間は把握しているので、それに間に合えばいいと考えたようです。機器の設定も、使い方のリハーサルも、発表の段取りも、場の雰囲気を読むこともなく、まさにぶっつけ本番の状態になりました。面接やスピーチ大会も聞き手がいるという点では同じですが、プレゼンには、聴衆の反応を見ながら話を進めていく冷静な匙加減というものがが必要です。出番ぎりぎりに駆け込んできた余裕のなさはそのまま発表の手際の悪さとなって現れてしまいました。

一方、練習を重ねた学生たちは、教室に入りきらないほどの大人数の聞き手の前で、とつとつと発表を行いました。発音は相変わらず良いとはいえませんが、何より練習の成果が落ち着いた態度に現れていたと思います。発表の優劣を問う場ではないので、いわゆる評価というものもありませんでしたが、自分のレベルに応じたイメージ通りのプレゼンを行えたかどうかは、自分が一番感じ取ったのではないかと思います。思い描いていた結果を出すために自分がどれだけのことをしてきたか、それによって、満足感も、心残りもあった発表の場であったことを、発表後の学生の表情が語っていました。

今年も何人もの卒業生が、学校を訪れてくれました。在学中はそれほどコミュニケーション能力に優れていたわけでもない人が、大学生活をすごし、立派な社会人になった姿をみて、月並みな表現ですが、努力を重ねて着実に進んできた人の自信が窺えました。今回発表した学生たちにも早くそのことに気づいてもらいたい、この文化交流祭りはそのための場でもあることを再確認した次第です。

TIJ文化交流祭りを振り返って2 中級クラスの文化紹介

西野敦子(TIJ)

今回のTIJ文化交流祭りでは自国の故郷紹介、自国文化の紹介、喫茶コーナーでの自国の食べ物の紹介が行われたのですが、ここでは、その中の自国文化の紹介の様子をまとめたいと思います。

自国文化といっても、TIJの学生の大半は中国人ですので、中国文化の紹介をすることになるのですが、一つのクラスが遊びの紹介をし、(蹴羽根と言って羽根を蹴る、蹴鞠のよう

な遊び)もう一つのクラスが太極拳の紹介をしました。

最近の若者の傾向なのか、日本に来て一年経たない学生なので「文化交流祭り」がピンとこないからなのか、受け身の学生が多く「そのうち、だれかが何かをしてくれるだろう」と考えているらしく、初めはなかなか動こうとしてくれませんでした。無理矢理リーダーを決め、発表内容を決め、実践練習をして...とやっているうちに最後のほうは、自分たちで「ああでもない、こうでもない」と言ひだし、やっと発表にこぎつけました。来ていただいた皆様が少しでも楽しんでいただけたなら、嬉しく思います。

発表は最終的に次のようなものでした。どちらのクラスもそれぞれに口頭で説明した後、体験コーナーを設けました。

1) 蹴毬子

紹介： 中国人ならだれでも子供の頃に一度はこれで遊んだ経験を持つそうで、バドミントンの羽根より少し大きいサイズの羽根をみんな器用に操って蹴っていました。一人でフリフティングをするように羽根を落とすまで蹴り続けて遊んだり、何人かで円陣になり蹴り合ったりして遊ぶそうです。また、競技としても確立されていて大会もあるとのことでした。私も中国に行ったときに実際に広場で若者がこの遊びに興じていたのをみたことがあり、面白そうだとは思ったのですが、実際に羽根にふれるのは初めてでした。

体験コーナー： 学生たちがやって見せてくれた後、希望された方には(強制的だったかもしれませんが...)一緒にやっていただきました。一緒に遊んでいたことは、学生にとってもいい交流になったと思います。

2) 太極拳

紹介： 太極拳は中国武術の一つで、創始者や起源については諸説あり、さらに歴史の中で多くの流派に分かれたようですが、現在広く普及しているものには「陳式」と「楊式」があり、「楊式」のほうが大きくゆったりした動作が多いため、お年寄りや太った方でも楽しめるそうです。そのため、中国の朝の公園でお年寄りがやっておられるのは「楊式」がほとんどだと言うことでした。また、健康のためだけではなく、武術というだけあって、「柔よく剛を制す」手法で、襲われたときの保身術としても使えるとのことでした。

体験コーナー： 実際に楊式の基本動作を2, 3紹介してくれて一緒にやってみました。基本動作を覚えるには至りませんでした。少しやってみただけで足が痛くなったのは年のせいでしょうか。保身術は学生同士がやっているのを見せてくれたのですが、見ていると「なるほど、そうやって相手を倒せばいいのか」と思わされましたが、実際には練習を積まなければ、あのようにうまくはいかないでしょう。しかしながら学生たちが型を作っている姿はなかなか様になっていました。

何はともあれ、すべてのクラスの学生たちが緊張しながらも、拙いながらもきちんとみんなの前で発表したり、お菓子を配ったりして交流会をやり遂げてくれたことが少し誇らしく思える一日でした。学生の成長は目にみえるものではないですが、皆様のおかげで一歩前進したのではないのでしょうか。

中級スピーチ大会優秀者スピーチ

新たな制度

張康?

みなさんもお存知だと思いますが、先月、去年起った殺人事件の裁判が行われました。私はこの裁判で使われた新たな制度についてお話ししたいのです。

この事件はただの殺人事件ではありません。被告人は被害者を殺した後、死体をバラバラにし、トイレに流したり、ゴミ捨て場に捨てたりして処分しました。そして、この裁判が用いた新たな制度に世間は注目しました。まずはモニターに被害者の遺体を映しました。被害者の死体はばらばらにされたため、わずかの骨と肉片しか回収できず、それがそのままモニターに映されました。そして、くわしく被告人にその時の考えや行動について聞きました。そして、彼女の人生を物語のように語りながら、被害者の生前の写真やゴミ捨て場の写真、ゴミを処分している時の写真をモニターに映しました。

私はこの制度が今年5月から始まる裁判員制度とともに正式採用されると聞き、すごく複雑な気分になりました。もし私が被害者の家族でしたら、決して自分の娘の遺体写真を公開してほしくありません。そして、自分も見たくありません。自分の大切な娘の遺体で、しかも、ばらばらなのです。だれもが心に傷が残ると思います。被告人にくわしく聞いたり、被害者のことを話させたりすれば、被告人にもっと素直に罪を認めさせることができるのかもしれませんが、そこにいる人々がどんな気分で聞いているのか考えたことがありますか。公正のためとは言え、世間にオープンにするためとは言え、こんなおそろしい制度では誰だって裁判員にはなりたくないでしょう。でも、もし本当に裁判員として呼ばれたら、ちゃんとした理由がない限り、その人には断る権利もありません。

結局、私はこの制度が良いか悪いか判断できず、今もこの問題について考えています。

涙の中で成長

李敏

両親に電話をかけた後で、ベランダで音楽を聞きながら遠くを眺めていました。日本に来てから、いつも住んでいるマンションの8階から近くの景色を眺めましたが、その時ほどきれいだと思ったことはありません。その時、雪が降っていたのです。ふわふわと空から舞い落ちる雪の花を見るとふるさとの色々な情景が目に見えびました。去年まで雪が降ると友だちと一っしょに雪だるまを作ったり、雪合戦をしたりしました。どんなに寒くてもみんないつも楽しかったのです。家族と生活した光景も頭の中で繰り返し浮かんできました。そして、知らず知らずのうちに涙を流していました。「あ、しょっぱい」と感じると、日本に来てから経験したことも思い出されました。

日本に来たばかりのころは交流できる人が主人しかいなかったのです。そのころ私は電車に乗れないし、テレビ番組の言葉もわからないし、一人で寂しくてたまらなかつたです。友だちに電話をすると、一っしょにショッピングに行ってくれるとか遊んでくれるとか、

そんな楽しかったことを思い出して、つい涙を流してしまっていました。前のおしゃべりが好きな私、いつも笑っている私、自分の考えも両親に話す私、そんな私は今どこにいますかと考えてしまいました。でも、友だちが慰めたり励ましたりしてくれたので、日本に来られたというチャンスを生かし、日本語の教室に行こうと思いました。最初は先生の簡単な言葉も理解できなかったので、他の学生がいつもぺらぺらおしゃべりをしているのを聞くと、あきらめたい気持ちでした。そして、家に帰って主人に相談しました。「中途半端にしてはいけないよ。そんな困難を克服しない限り日本で生活できないよ。」主人はこのよなことを言ってくれました。私は長い間黙り込んでしまいましたが、涙をまた流しました。その時、四川大地震で倒れた建物の中から助けを求め、生きたい、あきらめたくない、という声が耳のそばで聞こえてきました。みんなの絶対断念しないで、必ず困難に打ち勝とうという自信や勇気が私の心に深く染み込んできました。今、私はこんな健康な体、こんな良い学習環境、こんな幸せな生活をして、なぜ少しの困難を恐れ、やめたいと思うのか。頑張ります、頑張ります、毎日少しずつ進歩すれば、いつのまにか自分のレベルが高くなるはずだと思いました。それから元気を出し、積極的態で勉強を続けてきました。

それでも、アルバイトをやり始めたばかりの頃は、スーパーの品出し担当としての私にとってはものすごく厳しかったです。お客さんに聞かれた食品の名前とか場所とか私は全然聞き取れなかったので、「かわいそう」とか「言葉がわからないなら、やめた方がいいよ」ということを言われてしまいました。私はつらくて涙をいっぱいためました。その時、あるおばあさんに「すみませんがおねえさん、はちみつはどの辺にありますか。」と聞かれたのですが、「え、ひみつはわかりますけど、はちみつは聞いたことがない」頭の中でそう思いました。「あ、わかった、わかった。はちみつの“はち”は働き蜂の“蜂”だよ。はちみつの“みつ”は甘いあの“蜜”か」私は考えながら、探してみました。「ああ、あった、あった。蜂蜜の漢字は中国語とやっぱり同じだなあ。」「どうもありがとう。」とおばあさんは言ってくれましたが、その一瞬手助けできるのが楽しい、困っている人の役に立てるのがうれしいという感覚が湧いてきました。私は涙を拭いて次の仕事を楽しみにしていました。

今日本に来て 8 ヶ月目の私は自信が強くなっています。学校で間違ってもバイトでわからない言葉があっても、いつも積極的に受け止め、楽観的に生きています。涙は私にとって悪いものではなく、逆に涙を流すと迷いから抜け出せるというものです。みなさん、涙についてどう思いますか。将来何があっても、何回泣いても、絶対気を落とさないで自分の夢を追い続けてください。

中級スピーチ大会で考えたこと

歌原祥子（自由学園 非常勤講師）

今年も中級スピーチ大会に審査員として参加し、15人の学生さんたちの色々な思いを聞かせていただくことができた。ふだん1対1や2対1で授業することがほとんどの私にとって、たくさんの学生さんの学習の様子や成果にふれることができる貴重な機会である。

開始時間になって、TIJ の先生方の用意して下さった名簿とタイトルのリストとともに、メモ用紙と鉛筆を持って、審査員席にスタンバイする。今回もどんな話が聞けるか楽しみだったが、一方、初対面の学生さんばかりなので、聞くのを楽しんでばかりで途中ちゃんとメモを取っていないと、どの人がどの話をしてどんな印象だったかがすぐにごちゃごちゃになってしまうことが前回までの経験で分かっているので、ちょっと緊張した。

内容は、日本に来てひとりで生活したり、アルバイトをしたりするようになって感じた事について語る人が最も多かったが、自分の将来について考えたことや、人への感謝をテーマにした人、社会的な問題について考えを述べた人など、バラエティに富んでいた。審査員の立場から言うと、やはり他の人が取り上げなかったことは目立つので、もし「賞を狙う」のであれば少し変わったテーマを探すのも良いですよ、と学生さんにはアドバイスしたい。しかし、日本へ来ての感想という同じテーマについて話すにしても、切り取り方は様々だった。ならばいっそ何かひとつテーマを決めて、皆がそれについてスピーチをしなくてもきっと面白い大会になるのでは、と考えてみたがどうだろうか。

「賞を狙う」ためではないけれど、人に伝える話し方をするには、やはり「基本に忠実」が最も重要なことだろうと思う。これはスピーチに限らず、日本語の授業の中での限らず、話をしたり聞いたりするときにはいつも感じることだ。私の考える「基本に忠実」とは、正しい文法で、適切なことばを選び、はっきりと正しい発音で、そしてできれば相手の反応を見ながら話す、ということである。聞いている人に「あれ、今この人はこう言ったけれど、もしかしたらこうだったのではないかしら」と立ち止まって考えさせないようにすること、と言ってもいい。

スピーチの準備には、考えをまとめ、話す順番を考え、書き、推敲し、読み方の工夫や練習をする、という何段階もが含まれている。学生にはもちろん、先生方にはさらに大変な作業だと思うが、その分「基本」を磨くには絶好の機会になる。TIJ で何年も続けて取り組まれている意義は大きいと思う。

「続・楽しい中級の読み」を使って

市川さゆり (TIJ)

昨年夏までの作業は、以前 TIJ で作成した「楽しい中級の読み」の練習編の【質問】の部分、【質問】内容を理解しているかどうか確認する ×、【質問】本文に沿って進んでいく問いに自分で答えを書き込んでいき、内容の理解を確実にするもの、【質問】さらに考えを深めるための問いかけ、という構成に作り直すことで、学習者が主体的に読み進めることができる教材を作るというものでした。しかし、以前の「楽しい中級の読み」1・2は、1の前半と後半で難易度が異なり、急に難しくなるという傾向がある上、後半からは本文の内容に女性が書いたエッセイが多いなどの偏りがあり、学習者の年齢が若くなってきて、著者の思いが理解できず、読み進めることが難しい、また、本文の数が少ないために学習者に応じて選んで使うことができない、などの問題点がありました。そこで、新たに本文にふさわしいものを探して教材化するという作業をしてきました。今回も日本

人である私たちが読んでも面白いものという前提は崩さず、前半部にはやや科学的なものや新聞の投書を増やし、後半部にはエッセイといっても著者の思いが理解しやすいものや「岩波ジュニア新書」のように比較的やさしく何かについて説明したものなどを取り上げました。そして、以前に作成したものと混ぜて編集しなおした「続・楽しい中級の読み」を使って、昨年10月から今年の3月まで、昨年の4月に日本に来た学習者を対象に週に1回授業を行いました。

授業の実際：昨年の10月からは新聞の投書など短めのもの、今年の1月からはやや長めのものが読めるようになることを目標にしました。ここでは、『脳のはたらきがわかる本』という題名の本の「ごほうびシステム」というところを扱った授業の様子を取り上げてみます。【はじめに】を少し話したあとでまず、【練習】にある動詞と副詞について例文を出して紹介した後、問題をやりました。この【練習】が1・2に分かれて2つあるときは、とても時間がかかります。次に【練習】にある表現をまた例文を出して紹介し、教材にある例文をいっしょに読みました。ここでは、自分で文を作るという時間は取れませんでした。次に【ことば】を一つずつ紹介して意味を理解してから、やっと本文に入りました。各自が一人で読み進めながら【質問】と【質問】をやるという作業をしました。実際に本文の中には、【ことば】では取り上げられなかった「側坐核」など脳の専門用語や「スパイラル状態」など知らない語がたくさん出てくるのですが、それは学習者の読みの妨げにはならず、みんな【質問】に答えることに集中して読んでいました。この【質問】に答えていく中で本文の主要な内容を理解するというこの教材のやり方に前学期を通して慣れたことで、本文が長くなっても、苦にせず、自分で読み進めていました。その後、皆でいっしょに読んで【質問、】を確認していきました。目標を決めて達成することに喜びを感じた経験があるかという話をしながらの授業でしたが、本文の中に具体例がたくさん出ているせいか、学習者も自分自身の経験について話してくれ、皆の前向きな一面を知ることができ、日本語学習に対する態度とは違う人もいるのだなとちょっと意外に感じました。学習者の語彙の少なさのため、【練習】と【ことば】に時間がたくさんかかりましたが、本文が面白いため、読み終わったあとは「大変だった」というより「読めた」という表情をしていて、この教材作成の本来の目的である「主体的に読む」、また、「ものを読むことで思考を深める」という「読み」の本来の意味が果たせたのではないかと思っています。学習者の中には母国語でも本を読まない人が少なくありませんが、毎回の授業で日本語を読んでいくうちに「読むこと」に慣れ、積極的に読むという態度が身についていくのが感じられました。

広東省旅遊学校に赴任して

島崎元志

昨年(2017)の11月末から中国・広州市にある広東省旅遊学校にて教鞭を執っております。

当校は正式には広東省旅遊職業技術学校といます。名前の通り旅行に関するあらゆることを教えています。例えば、英語、日本語、ホテル管理、ガイドの養成、コックの養成、舞踏等々。勿論、それぞれの学部、学科に分かれています。

当校は国立で、重点学校の指定を受けています。学生数は6000人。うち、学内の寮に住むもの4000人、残りは自宅通学者が寮を嫌って近くのアパートを借りて通学している者です。寮生は一室10人の生活を強いられています。私のような外国人教師はそのような部屋を二部屋使っています。厨房の関係でどうしてもそうなるのです。

学生の構成は、日本流で言えば、職業高校とその上に専門学校があります。日本語の学習者は300人強。日本のリゾートホテルでの卒業研修を目指して勉強しているのは200人位。その内、日本のホテルが来て面接試験に合格するのは、昨秋で33人。学校は今年は50人合格をめざして張り切っていますが、日本のホテルが今の経済状況で研修生を増員できるかは疑問です。パートも含めて社員を解雇したホテルには、国が研修生受け入れを禁じているからです。

さて、肝心の日本語教育のことですが、教科書は「標準日本語」で、3～4年前に時代に合わせて内容が改定されています。パソコンや携帯が登場しています。当校ではこの教科書を1年(9月から翌6月)で初級(上)(下)2冊を仕上げ、9月から中級(上)をやりながら、11月中旬のホテルの面接試験にそなえます。教師は、中国人5人、日本人2人です。日本人は私と日本企業の駐在員の奥さんと、その方の勤務期間はご主人次第ですからきわめて不安定です。指導区分は、日本人が会話と日本事情的なことをやり、文法・精読は中国人の担当です。短文暗唱が中国における外国語教育の特徴です。

私が先日まで困っていたことは、学校が私をビジネスとして利用していたことです。日本人教師に直接教えてもらえるからといって、生徒から年間5000円を特別徴収したのです。そのやり方として、教養科目として習うクラスまで担当させられていて、総花的に各クラスを週一回授業させられていたのです。

職業高校の学生は、普通高校を落ちた子なのでレベルが凄く低いので、90分授業に耐えられないのです。授業中に鏡を取り出して化粧をしたり。その他まるで程度の悪い猿のようなもいます。

こういう状況にぶち切れて、「こんな担当の仕方が続いたら、もう日本へ帰る、話が違いくらい」と抗議したら、やっと4月20日からおかしな3クラスの担当が外れました。学校は特別授業料を取っているのです、説明に苦慮したようです。

中国にいと学校との格闘が多いです。流されない覚悟が肝心です。

事務局からのお知らせ

「上級から学ぶ日本語」の文型勉強会

日時	第1回	6月23日(火)	2:30~4:30
	第2回	7月31日(金)	2:30~4:30
	第3回	8月19日(水)	2:30~4:30
	第4回	9月29日(火)	2:30~4:30
	第5回	10月26日(月)	2:30~4:30
場所	T I J 東京日本語研修所		

参加ご希望の方は、前日までにT I Jにメールまたはお電話でお申し込みください。

授業見学について

「外国人にどのように日本語を教えたらいいか」「もっと楽しい日本語クラスにしたいのだが、どうすればいいだろうか」「外国人はどのように日本語が上達していくのか」などに興味のある方。T I Jでは、1回1,000円で授業を見学することができます。見学希望の方はT I Jまでお電話ください。

続・楽しい中級の読み

本号の記事にもありましたが、T I Jでは数年前から中級の読み教材を作成しています。ご興味、関心のある方には、実費でお分けいたします。よろしかったら、実際に学習者に使ってみて、ご意見、ご感想をお寄せください。ご希望の方は、T I Jまでメールまたはお電話ください。

続・楽しい中級の読み 1 25 編収録

本文編 B 5 判 44 ページ 450 円

練習編 B 5 判 68 ページ 750 円

T I J ホームページリニューアル

T I J のホームページがリニューアルされました。このT I J 日本語教育研究会通信も、もうすぐホームページで見られるようになります。一度ご覧ください。